

氏 名	GAO ZHUONING
学 位 の 種 類	博 士 (経 済 学)
学 位 記 番 号	経 博 甲 第 3 号
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 17 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	日本軽自動車産業の発展過程 ―高度経済成長期を中心に
論文審査委員	主 査 教 授 古 内 博 行 副 査 教 授 岩 崎 健 久 副 査 教 授 藤 井 隆 至

## 論 文 内 容 の 要 旨

学位論文題目は上記に掲げられているとおりであり、その内容構成は「序章 課題と方法」、「第一章 スズキ株式会社（以下、スズキ）の発展過程」、「第二章 ダイハツ工業株式会社（以下、ダイハツ）の発展過程」、「第三章 三菱自動車工業株式会社（以下、三菱）の発展過程」、「終章―結論」となっている。本論文は日本の軽自動車産業経営史論ないし軽自動車産業論であり、これまでの自動車産業研究史に新たに一石を投ずる問題提起的な意欲的作品である。それはすぐに触れる著者の課題意識からおのずと明らかとなろう。

著者はまず自動車産業研究史における 6 つの代表的な先行著作、すなわち、(1)宇田川勝『日本の自動車産業経営史』（2013 年）、(2)四宮正親『日本の自動車産業――企業者活動と競争力：1918-70』（1998 年）、(3)下川浩一『グローバル自動車産業経営史』（2004 年）、(4)桜井清『日本自動車産業の発展』（2005 年）、(5)松浦茂治『日本自動車産業の発展分析と展望――雁行形態論の分析』（1990 年）、(6)小野裕『戦後日本自動車産業の発展――寡占市場の論理的、実証的研究』（1999 年）にそれぞれ簡単な解説をおこなったうえで目次内容を詳らかに提示し、軽自動車がいずれの著作においても考察射程外に置かれている研究史上の空白を一大問題点として指摘する。これが本論文に示される著者の基本的着眼点であり、並々ならぬ研究意欲の背景にほかならない。

それに続いて自動車産業政策の領域において軽自動車のみを対象とする独自の産業政策が展開されてこなかった事実をスズキのかつての社長鈴木修による「『軽自動車は自動車ではない』と言われた時期がありました」との無念

めいた述懐に呼応させつつ確認したうえで、課税や規制、そして環境へのやさしさの面から軽自動車の普及が進んだ経緯に言及し、具体的な分析に入る。

以下では著者の主張の全体像に収斂するようなかたちで要約していく。

本論文を読み込むと章立てでスズキとダイハツの発展過程が別個に論じられているが、単なる筋書き的文脈ではなくそれを超えて、この2つの企業が相互に切り離し難く結びついているのがわかる。たとえば、スズキのアルト、ワゴン R に対してダイハツのミラとクオーレ、ムーヴといった具合に熾烈な市場シェア競争を繰り広げながら軽自動車界の二強としての地位を占めるに至っているが、そこにはプライスリーダーとしてのスズキに対して販売第一主義（営業網の全国拡充による販売力の充実強化とトヨタ流の顧客志向）にもとづくダイハツの営業戦略が如実に投影されている。これに比較すると、三菱は多種多様な車を揃えた製品多角化を背景にしながら需要変動即応体制（著者の表現にしたがえば市場至上主義）を敷いて機動的な軽自動車づくりを目指しており、その意味では市場シェアはスズキ、ダイハツに遠くおよばないものの、独自の存在感を発揮することとなっている。著者の指摘するとおり、戦略的な商品投入が三菱の特徴をなす。需要のアンテナを鋭敏に張り巡らしたうえでの一種の独歩的な変種変量生産戦略を採用していると考えてよい。著者の叙述を辿っていくと3社の位置関係はこのように理解される。

以上の点をスズキ、ダイハツの関係に絞りつつ著者の叙述に即してもう少し詳しく立ち入ると、以下の推察が導かれる。この二強軽自動車企業は共通の経営特質を有す。すなわち、それは低価格と品質保証（技術・商品開発力をも含めて）の複合的競争に適合する経営戦略を選択する点でその共通の特質が貫く延長線上に成り立っている先行発展企業スズキのプライスリーダーシップであり、やや後発発展企業であるダイハツの販売第一主義なのである。経営管理の近代化、生産の現場での効率性向上、高いブランド力形成は共通である。すなわち、共通の土俵の上に立ちながらもなお力点の置き方の違いが浮かび上がるというわけである。その究極の共通目標が市場シェア獲得戦略にほかならない。2強企業の違いは実に微差ということになろう。市場シェアの首位の座を巡る争いの厳しさが枢要性を帯びて際立ってくる所以である。

著者はこうして両企業の差異を挙げながらも以上の統一的な着地点を見出している。そうした着地点を浮き彫りにすることが本論文での著者の眼目のひとつとあってよい。そのことを踏まえて日本社会における軽自動車の広範な受容性のなかでスズキ、ダイハツが市場シェアで互いにしのぎを削る状況に三菱の独歩戦略が重なって特有の競争的状況が創り出されていると著者は総括的に結論づける。この点で著者の叙述には難渋さがみられず、論旨が辿り易い。動態的な分析を通じて明快な論拠づけがなされていると看做しうる。

## 論文審査の結果の要旨

著者は本論文において歴史と現代をつなぐ叙述をおこなっている。いずれの章においても 21 世紀も約 5 分の 1 を経ようとする企業の現在を取り上げ、そこから過去を俯瞰する。といっても後時代の著者の透徹した眼だけで過去を捉えるというわけではなく、過去を同時代人の眼から追体験する視座を併せ持つ着想が背後にある。つまりは、歴史的反省の感覚を研ぎ澄ます一方、歴史研究が一人歩きしないように自己制御する独特の分析手法を採り、手堅い実証研究となっている。確かに軽自動車産業発展の原点を探るべき研究が軸になっており、その意味で高度経済成長期に考察の中心を置くとしてもいいのだが、21 世紀に入ってから今日の状況をも周到に組み込んでいる点で包括的な軽自動車産業経営史論ないし軽自動車産業論の体裁を整えているのは以上の事情からである。三菱に着目する視点はまた、三菱が総合自動車メーカーであるがゆえに著者に対して単に軽自動車だけに絞ろうとする眼界狭小を回避させる意味合いを与えたと推測される。それだけになおさら本論文が本格的な軽自動車産業経営史論ないし軽自動車産業論となっているのである。

本論文は自動車産業研究史上における空白を埋めるという意味から軽自動車産業発展史を体系化していこうとする著者の粘り強さに裏打ちされて躍動感に満ちる格段に力のこもった作品に仕上がっている。生彩に富む分析が重厚に展開されていて興の尽きることのない点が本論文の最大の魅力である。社史などの内部的な資史料を縦横に駆使しながら立体的に企業の沿革を説いているからに違いない。本論文は軽自動車産業の発展をリアルに描写することに成功している。これは本論文の主題が論ずるに値することを証すのみならず、自動車産業論ないし自動車産業経営史という広大な研究領域のなかである特有の局面を全体関連のなかで平明に読み取らせうる著者の卓越した力量を端的に表すものでもある。本論文の創見性はまさしくここに集約される。

本論文を自動車産業研究の批判的継承作業の一環として位置づけるならば、研究史に新たな一頁を加えるだけでなく、別種の自動車産業論として焦点をあてることも十分可能な精妙的確でなおかつ画期となるべき作品ということになろう。産業政策の対象として等閑に付されるだけでなく、自動車産業の研究対象としても考察射程外にあった軽自動車という半ば埋もれた鉱脈の歴史的な発掘を試みる著者の研究に軽自動車産業経営史論ないし軽自動車産業論のパイオニア的役割を果たしたとの意義づけを付与したとしてもそれはあながち誇張ではあるまい。日本語表現の熟成の点や用語の不安定性（たとえば市場至上主義）などに注文がないわけではないが、本論文の意義や全体としての体裁にいささかも負の影響を与えるものではない。むしろ本論文全体にわたり鮮明に窺える日本語表現の陶冶と洗練への努力の痕を評価しなければならぬであろう。課程博士号授与に十分値すると判定して差し支えない。